

恭仁京の造営過程と京域の範囲について

筒井崇史

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

恭仁京の造営過程と京域の範囲について

筒井崇史

1. はじめに

恭仁京は、聖武天皇により天平12(740)年から同16(744)年まで足かけ5年にわたって営まれた古代宮都である。恭仁京のうち、中心部分である恭仁宮については、京都府教育委員会が実態解明を目的として、昭和48年度以降、継続的に発掘調査を実施され、恭仁宮跡の四至が確定されている。また、宮内における重要な調査成果として、大極殿の北方に2つの内裏区画施設が設けられていることが確認された(内裏東地区・内裏西地区)。

一方、恭仁京域についても、近年、注目すべき発掘調査成果が得られている。1つは上狛北遺跡の発掘調査成果であり、もう1つは岡田国遺跡の発掘調査成果である。両遺跡では、ともに恭仁京(特に右京)に関わると推定される溝や道路側溝、掘立柱建物、井戸などが検出された。これらの調査成果をもとに、恭仁京域における造営過程について検討するのが本稿の目的である。さらに、この検討結果を踏まえて、現段階における京域の範囲についての私案を示すこととしたい。

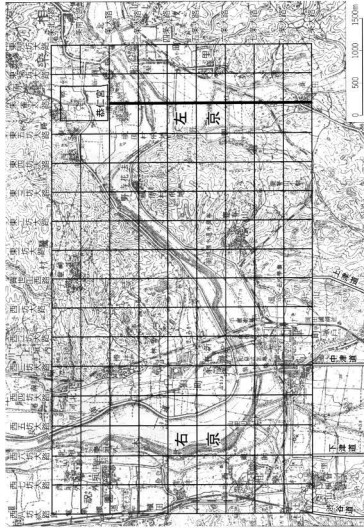
2. 恭仁京域研究の現状

これまでに提示された恭仁京域に関する研究成果については、近年、山田邦和によってまとめられている^(注1)。あわせて山田自身の京域復原案も提示されている。

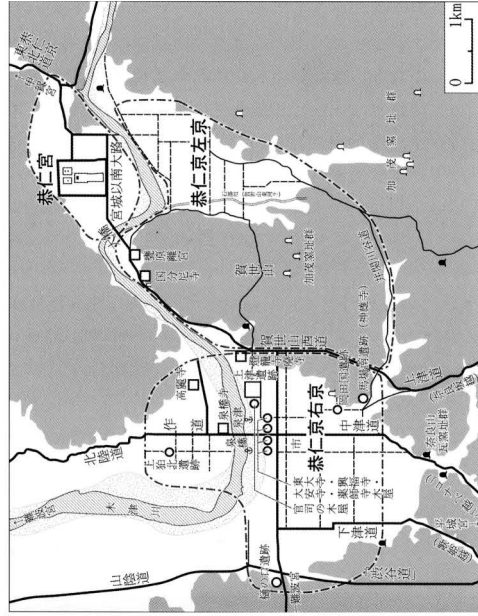
さて、恭仁京域に関する先駆的な研究は、歴史地理学者の足利健亮によって提示された^(注2)。足利は恭仁宮の所在する加茂盆地だけでは平城京と同サイズの京域を確保するには狭すぎることに、『続日本紀』天平13年9月12日条に見える「從賀世山西道以東為左京。以西為右京。」という記事に着目し、賀世山(現鹿背山)^(注3)の西側に左京と右京を分かち道(必ずしも朱雀大路とは言えない)が存在したと考えられ、加茂盆地に左京を、鹿背山の西側に位置する木津地区や上狛地区に右京を復原する案を提示した(第1図1)。これは、恭仁京域について最も基本的な復原案となり、山田は、この復原案「以降の恭仁京研究はすべて同案を基礎として論じられることになった」と評価した。

次に、足利復原案の提示以降に示された、恭仁京域の復原案について簡単に見よう。

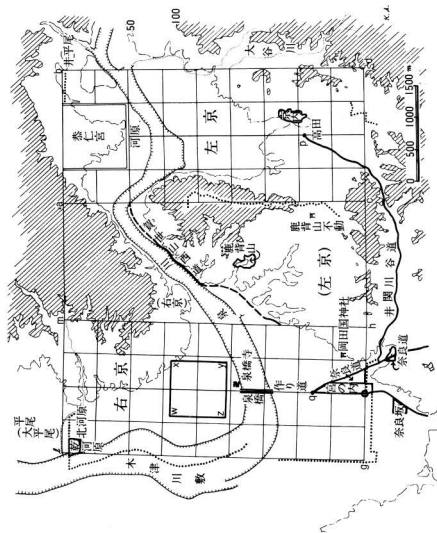
奥村清一郎は、後述する木津川市上津遺跡の発掘調査の成果と、木津地区の地割等を再



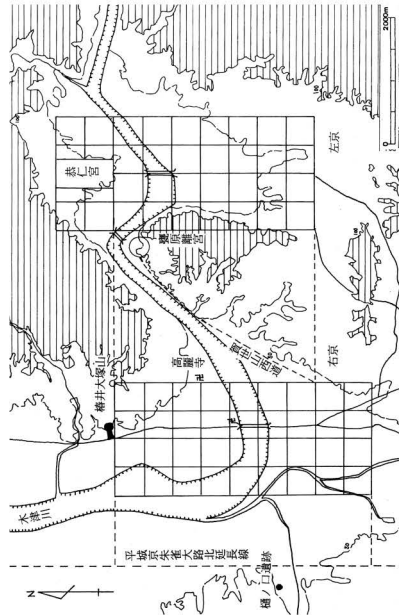
3. 岩井照芳復原案



4. 山田邦和復原案



1. 足利健亮復原案



2. 伊野近富復原案

第1図 恭仁京復原図

検討し、京城の復原を行った^(注4)。おおむね足利案を踏襲するものであるが、条坊の中軸線等の設定条件が異なる。さらに平良泰久は、右京城の施設として諸寺院の木屋所や泉津などの所在地についての検討を行っている。

歴史地理学者の千田稔は、足利案とは全く異なる復原案を提示した^(注5)。足利が基本とした平城京型の条坊ではなく、鹿背山を含む東西方向に長い京城の復原案を提示した。また、恭仁宮はこの復原案では恭仁京の北東隅に配置されることになる。

伊野近富は、足利案を修正した復原案を提示した^(注6)(第1図2)。伊野は、平城京の造営尺が大尺を基準とするのに対して、恭仁京は小尺を基準に設定されたと考え、平城京よりも一回り小さい復原案を提示した。また、右京と左京は足利案と同様、東西に離れているものの、その北辺の位置をずらし、右京城にできるだけ多くの平野部を取り込んだ。

近年注目される成果として、岩井照芳の復原案がある^(注7)(第1図3)。岩井復原案の重要な視点は、足利が城山も含む鹿背山西麓に想定した「賀世山西道」を、鹿背山と城山の間を南北方向に伸びる「釜ヶ谷」という谷筋を通る道として想定した点にある。これによって、恭仁京の左右京を定める道が南北方向となり、「釜ヶ谷」＝「賀世山西道」とした。さらに奈良盆地を南北に縦貫する「上津道」などの主要交通路が恭仁京城まで延伸されていると考えた上で、京城の復原を行っている。ただし、鹿背山等の山塊も含み込んだ条坊復原であるため、千田案と同様、平城京等にくらべて著しく広大な復原案となっている。

以上の復原案は、「恭仁京城が矩形である」との前提で復原を試みられたものであるが、これらに対して山田は矩形のプランを持たない復原案を提示した(第1図4)。恭仁京以外でも、紫香楽京や難波京、あるいは後世の保良宮・由義宮に伴う京城は、地形的な制約もあって、「全体に整った方形にできたかどうかは疑わしい」とする。また、恭仁京城の想定範囲には、主要官道がすでに設置されており、その周辺には、「泉津」をはじめ各種の施設や高麗寺・泉橋寺、馬場南遺跡(神雄寺跡)などの古代寺院や遺跡が存在していた。山田は「恭仁京の造営とは、こうした既存の道路や設備を可能な限り取り込んでいった」と考え、岡田国遺跡や上粕北遺跡のように「条坊制」が部分的に施工されたところもあるが、「統一された基準の条坊制が恭仁京の全域の隅々まで敷かれていたと考える必要はない」と述べる。従来にない新しい見解で、恭仁京研究に関する新たな方向性を示すものとして注目できる。

3. 発掘調査事例の検討

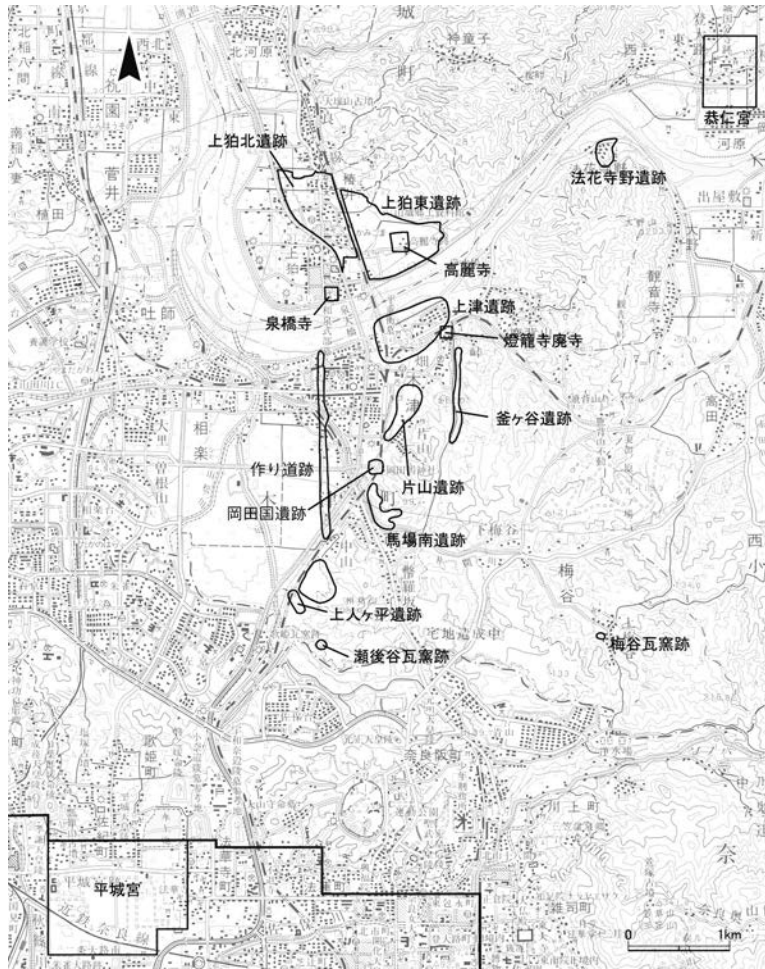
恭仁京城に関する発掘調査は、右京城での調査事例が多く、左京城での調査成果はほとんどないのが現状である。以下では、検出された遺構の年代に注意しながら主要な遺跡を

概観することにした(第2図)。

なお、本稿では、恭仁宮に遷都した天平12年12月から平城宮に遷都した天平17(745)年5月までの時期区分として、「恭仁宮期」という区分を便宜的に使用する。

上狛北遺跡(木津川市山城町上狛宝本・西浦代、平成22年度調査) 木津川が西に向かっていた流れを大きく北へ方向転換する右岸の沖積地に位置する。調査の結果、土坑、南北方向の溝、掘立柱建物、井戸などが検出された(第3図1)。特に注目されるのは、土坑S X96と南北方向の溝S D21である。

土坑S X96は、一辺3m程の方形を呈し、深さは約2mを測る。木簡や削屑、墨書土器、須恵器・土師器・製塩土器、瓦類などの大量の遺物が出土した。木簡に年代の書かれたものはなかったが、出土土器は、奈良時代中頃(平城宮土器Ⅲ古段階にほぼ併行)に位置づけ



第2図 恭仁宮跡関連主要遺跡分布図

られ、恭仁宮期よりもやや先行すると考えられる。S X96は造営作業等で生じた不要物などを廃棄した土坑であろう。

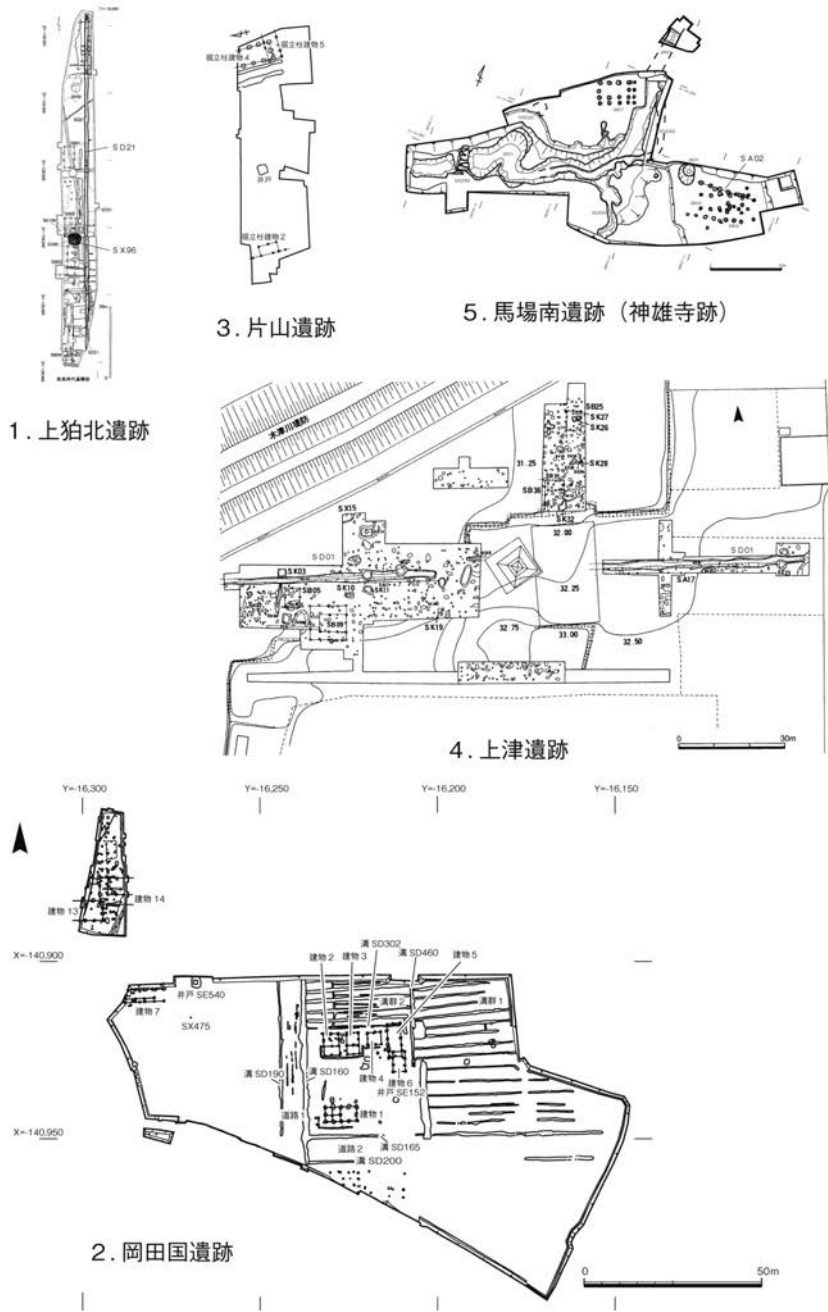
溝S D21は、調査区を南北方向に縦断する溝で、総延長100m以上、幅0.7～1.1m、深さ0.1～1.0mを測る。多量の須恵器や土師器、瓦類などが出土した。出土土器は、おおむね奈良時代中頃でもやや後半寄り(平城宮土器Ⅳにはほぼ併行)で、恭仁宮期よりも後出する。

このほか、掘立柱建物4棟を検出した。これらのうち1棟は、土坑S X96を埋め立てたのちに建てられており、遺構の先後関係が確認できる。溝S D21と4棟の掘立柱建物は、正方位を指向して配置されていることから、一体的に計画・配置された同時期の遺構と考えられる。

岡田国遺跡(木津川市木津大谷、平成27～30年度調査) 上狛北遺跡から南南西へおよそ2.8kmのところの位置し、井関川の氾濫原に立地する。足利が想定した「賀世山西道」と、右京域の中軸線と推定された「作り道」の間に位置する。調査の結果、ほぼ正方位を指向する道路2条と掘立柱建物10棟のほか、井戸や土坑などが検出された(第3図2)^(注9)。遺構の時期は、恭仁宮期と推定されるもののほか、奈良時代後半から平安時代にかけてのものが確認された。道路2条は直交しており、その北東側に掘立柱建物6棟、井戸1基などが確認された。この建物群が広がる範囲は、おおむね29～32m四方で、平城京の条坊の16分の1町に近い面積を持つ。

片山遺跡(木津川市木津片山・池田、平成15・16年度調査) 上狛北遺跡から南東へ2km余りのところに位置し、上津遺跡南方の段丘上に立地する。調査は、足利が想定した「賀世山西道」のルートを横断するように実施されたが、「賀世山西道」を検出することはできなかった。調査の結果、ほぼ正方位に近い掘立柱建物や溝、井戸、門とそれに取り付く柵列状の遺構などが検出された(第3図3)^(注10)。出土遺物から恭仁宮期よりもやや新しい時期に造営され、長岡京期には廃絶したと考えられる。門の東側で井戸や掘立柱建物を検出していることから、宅地の一画である可能性もある。なお、現状の地形から類推すると、この門の西側に「賀世山西道」が通る可能性が高い。

上津遺跡(木津川市木津宮ノ裏、昭和52年度調査) 上狛北遺跡から南東へ約1.5km、木津川を挟んだ南側に位置し、木津川の自然堤防上に立地する。平城京の外港「泉津」推定地であるが、津そのものに関わる遺構は検出されていない。調査の結果、掘立柱建物や溝・土坑などが検出され、「泉津」を管理するための施設ではないかと推定されている(第3図4)^(注11)。また、「泉」とヘラ書きされた丸瓦も出土している。検出された溝S D01はやや南に振るものの、おおむね東西方向で、総延長160m以上を測る。出土遺物から奈良時代前半に掘削され、奈良時代末には埋没したと考えられる。S D01は、恭仁宮造営以前に正方位



第3図 恭仁京関係遺跡遺構平面図

の規格性を持った遺構と考えられるが、恭仁京造営にあたって何らかの基準線となった可能性も想定されている。恭仁宮期とはほぼ重なる奈良時代中頃の遺物が最も多く出土している。

馬場南遺跡(神雄寺跡)(木津川市木津糠田、平成20年度調査) 上狛北遺跡から南南東に3km余りのところに位置し、丘陵の支尾根とその間に入り込む小規模な谷地形上に立地する。万葉歌木簡や彩釉山水陶器、大量の灯明皿、さらに「神雄寺」と墨書された多数の土器が出土した^(注12)(第3図5)。遺跡の成立時期は、恭仁宮遷都以前の天平年間と推定され、離宮や貴族の別荘などの可能性が指摘されている(第1期)。平城遷都後、しばらくの中断期を経て奈良時代後半に再び遺構が造営される。この段階が「神雄寺」であったと考えられる(第2期)。馬場南遺跡では、地形に制約されるため、おもな遺構群の造営方位は正方位とならないが、第1期と第2期の間に位置づけられる柵S A02はほぼ東西方向を指向しており、他の遺構群と大きく異なる。時期的には恭仁宮期と推定され、S A02は恭仁京と何らかの関わりがある可能性がある。

上狛東遺跡(木津川市山城町上狛、平成10年度調査) 上狛北遺跡の東に接する遺跡で、丘陵の縁辺部に位置する。調査の結果、ほぼ正方位の東西棟の掘立柱建物と推定される柱穴群などが検出された^(注13)。わずかな出土遺物から恭仁宮期かそれよりもやや先行する時期のものと考えられる。柱穴群は、高麗寺の北東約300mのところで確認されている。調査範囲が狭いため、遺構の性格等は明らかでないが、高麗寺に近接することから造営氏族の居宅の可能性も指摘されている。

小 結 本項では恭仁京域に関わる遺跡を取り上げた。特に上狛北遺跡と岡田国遺跡では、正方位を指向する溝と掘立柱建物が検出されており、出土遺物等から恭仁宮期に位置付けられ、恭仁京右京に関わる遺構である可能性が高い。また、恭仁宮期よりも先行するが、上津遺跡でも正方位を指向する溝と掘立柱建物が検出されている。一方、片山遺跡では、恭仁宮期よりもわずかに遅れて営まれた正方位を指向する掘立柱建物などが検出されている。さらに、馬場南遺跡や上狛東遺跡では、恭仁宮期と推定される正方位を指向する遺構が、少数ながら確認されている。

このように、足利が恭仁京右京と推定した地域においては、近年、正方位を指向する遺構群の検出が相次ぎ、恭仁京域の造営が実際に着手されていたことをうかがわせる。

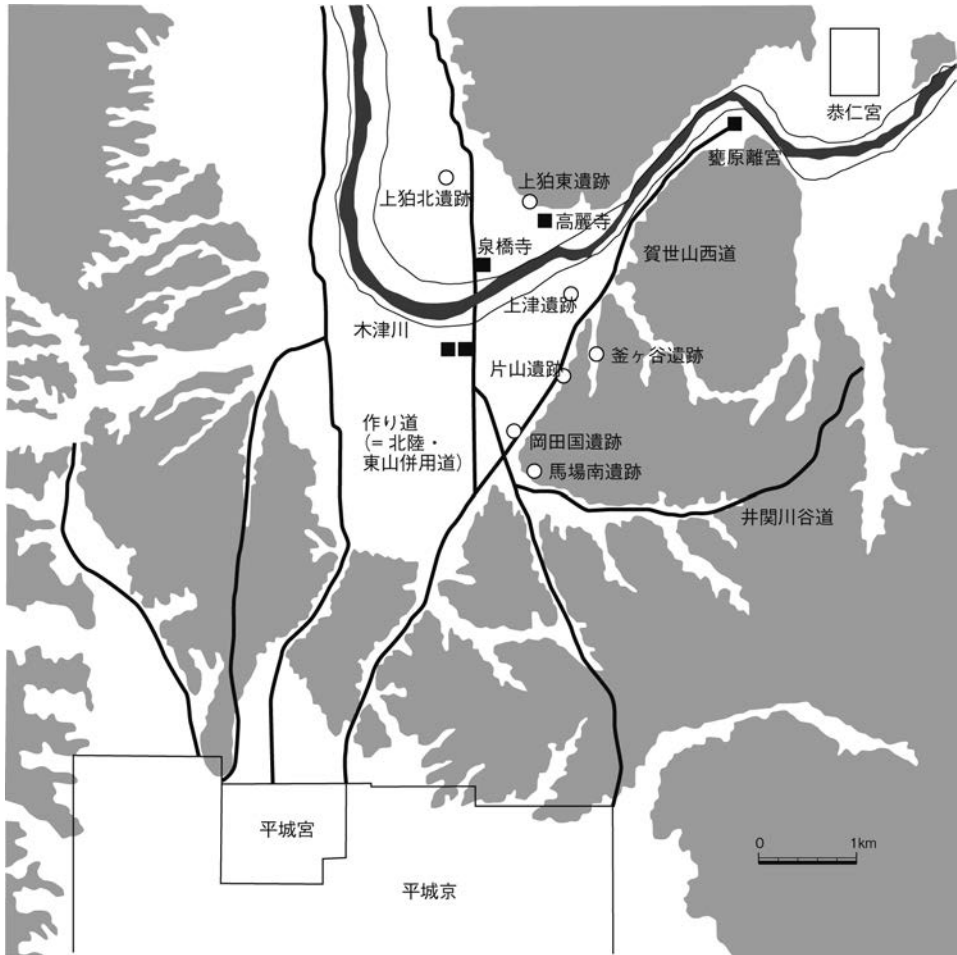
4. 京域復原に関する古道等の検討

恭仁京の京域復原は、おもに歴史地理学的な立場から検討されてきた。『続日本紀』などの文献には恭仁京の空間的な事実についての情報がいくつか記載されている(第4図)。

本項では、そのいくつかを検討したい。ただし、以下で取り上げる古道等の痕跡については、考古学的に確認されているわけではない。

賀世山西道 恭仁京の右京と左京を分ける道として、つとに有名であるが、その痕跡は確認されていない。また、この道の復原ルートには、足利が当初に示した鹿背山・城山山塊の西麓沿いのルートと、岩井が提唱した「釜ヶ谷」ルートとがある。筆者は、以下の理由により足利が当初想定したルートが「賀世山西道」としてふさわしいと考える。

まず、釜ヶ谷遺跡は3回にわたって発掘調査が行われており、蛇行する流路と、大量の墨書人面土器をはじめとする祭祀遺物などが検出されている。発掘調査は谷の中央部に限られるが、そもそも道が存在したかどうかは明らかでない。また、「釜ヶ谷」の両側に山塊が存在するため、右京域からも直接見えない道である。このように右京域の設定基準線



第4図 恭仁京をめぐる古道・遺跡

というには、道としての機能は、想像以上に貧弱である。

以上のような点から、筆者は、「賀世山西道」を足利が当初想定した復原ルートが妥当と考える。また、その成立は、甕原離宮との関わりの中で考えるべきであろう。甕原離宮に関する遺構は未検出であるが、『続日本紀』の記事等から恭仁宮の南西にあたる木津川市加茂町の法花寺野遺跡付近に想定する説が有力である。^(註15) 甕原離宮は、『続日本紀』和銅6(713)年6月22日条に初出することから、筆者はこの頃に平城宮から甕原離宮へ至る道として整備されたと考えている。

作り道＝北陸・東山併用道 足利が現存する地割等から抽出し、「作り道」と命名された道路痕跡がある。^(註16) 「作り道」は、現在の木津市街から、木津川を渡って北岸の上狛地区までをほぼ南北に縦断する道で、奈良時代の北陸道・東山道に相当すると考えられる。恭仁京右京の造営にあたっての基準線と推定された。この道が木津川を渡るところには、「泉橋」という橋が架けられていたと考えられる。^(註17) また、木津川の南岸に面したところには、大安寺や薬師寺の木屋所があったようである。^(註18) このように「作り道」の周辺には木屋所や「泉津」をはじめとする諸施設、あるいはそこで働く人々の居宅などが展開していた推定される。

東海道 また、足利は、東海道のルートにも言及している。^(註19) 足利は、平城宮東辺付近から北に位置するコナベ古墳の脇を通る「コナベ越え」から「賀世山西道」を通して、加茂盆地へ抜けるルートを想定している。しかし、上述のように、筆者は、「賀世山西道」は甕原離宮へ至るための道と考えており、そこから先は、山塊が木津川まで迫っており、通行が困難となる。ここに橋が架けられたのは、『続日本紀』の記述から天平14(742)年8月のことと考えられる。

筆者は、東海道のルートとして、足利が恭仁京城の復原過程で明らかにした「井関川谷道」の方がよりふさわしいと考えている。「井関川谷道」は、馬場南遺跡の南側を、おおよそ東西方向に流れる井関川沿いに想定されている道である。この「井関川谷道」を東へ向かうと、丘陵の最も低いところを通過して加茂盆地に至ることができる。同道沿いの加茂盆地には奈良時代前半の複数の須恵器窯跡の分布が知られている。^(註20) これらの須恵器窯の製品は、「井関川谷道」や井関川の水運を利用して平城京へ運ばれたと考えられる。ちなみに、馬場南遺跡も、この道の木津地区側の入口に位置している。

以上のような点から、筆者は、奈良時代の東海道は「コナベ越え」で山背国に入り、東部の丘陵に沿って北東に進んだのち、「作り道」との分岐点付近からこの「井関川谷道」を東へ進んで加茂盆地に至るルートが妥当と考えている。

泉津 木津川南岸に所在した平城京の外港と考えられる津である。ただ、考古学的な知

見は上津遺跡の調査成果に限られ、津そのものの遺構は未確認である。文献史料や木簡から、寺院や邸宅などの建設に使用する木材の調達などを行った「木屋所」等の存在が知られる。これらの施設は、作り道＝北陸・東山併用道の中軸線とし、木津川の南岸に広がっていたと推定される。その成立は、少なくとも藤原宮造営時まで遡る。^(注21)

5. 恭仁京域の造営過程とその範囲について

本項では、以上の検討成果を踏まえて、恭仁京域の造営過程とその範囲について、筆者の考えを述べることで、本稿のまとめとしたい。

ところで、岡田国遺跡の調査では、道路状遺構が直交することが確認されているので、恭仁京に「条坊制」が施工されていた可能性を肯定する意見がある。しかし、実際のところ、大路・小路といった幅の異なる道路や、1坊あたりの規模が判明した事例など、確実な条坊に関連する遺構は確認されていない。したがって、上狛北遺跡や上津遺跡で確認された遺構群を、現時点で「条坊」と呼ぶのは適切ではないと考える。ここでは、正方位に区画された道路状遺構や溝とその周辺に掘立柱建物などが広がる景観を「街区」と呼んで「条坊」とはあえて区別して記述を進めることにしたい。

(1) 恭仁京の造営について

恭仁京の造営は、足利や山田が指摘するように、恭仁京造営以前の古道や遺構をもとに実施された可能性が高い。すなわち、「作り道」(＝北陸・東山道併用道)や「泉津」(＝上津遺跡)は、恭仁京以前に設置されており、これらを核に「街区」の整備が進んだと想定される。また、近年の発掘調査の成果に注目すると、先行する「街区」や一般的な集落が確認されていないところにも、恭仁宮期になると「街区」の形成が認められるところがある。これには上狛北遺跡や岡田国遺跡が該当する。このことは、恭仁京の造営に伴い、「街区」が新たに形成、拡大されたことを物語る。これが、つまるところ恭仁京の造営であった可能性が高い。

(2) 恭仁京造営過程の復原

これまでの発掘調査や文献等で確認した遺構や各種施設を、おおよその年代観をもとに相対的な配列を行うと、以下のように整理できる。

第1段階(恭仁宮造営以前) 足利が復原した「賀世山西道」や「作り道」などの古道、「泉津」とその周辺に広がる木屋所、あるいは上津遺跡溝S D01などが想定できる。京域に含まれるかどうか不明であるが、甕原離宮などもこの段階に位置付けられる。ただ、のちの恭仁京域に含まれていたと推定される地域には遺構や遺物が全く出土しない地域も認められ、この地域が必ずしも人口稠密地域ではなかった可能性がある。

第2段階(恭仁京造営期) 今のところ、明らかに造営に関わる遺構といえるのは、上狛北遺跡で検出された土坑S X96のみである。S X96からは平城宮土器Ⅲ古段階の土器が多数出土しており、恭仁宮期よりも先行すると考えられる。また、多数の木材片や炭化物などが出土しており、造営工事等に伴う不要物を廃棄した土坑と評価できる。この造営工事が恭仁京の造営に関わるものであることも間違いなからう。

第3段階(恭仁京整備期) 上記の上狛北遺跡土坑S X96を埋め立てて掘立柱建物が造営され、それと同時期と推定される溝S D21が掘削されるなど、京城における「街区」の整備が進む段階である。上狛北遺跡の「街区」はこの段階になって新たに設けられたもので、岡田国遺跡で検出された道路や掘立柱建物についても同様の評価することができる。やや後出すると考えられている片山遺跡の掘立柱建物群や、恭仁宮期と推定される上狛東遺跡の柱穴群も同様に「街区」形成に関わる遺構群であろう。この京城の整備に伴う記事として、『続日本紀』天平13年8月28日条「遷平城二市於恭仁京。」や同年9月12日条「班給京都百姓宅地。従賀世山西道以東為左京。以西為右京。」などがあり、確実に恭仁京の造営が進められていることがわかる。

第4段階(平城遷都後) 以上のような遺構群の多くは、8世紀後半に続かない。発掘調査の成果によると、片山遺跡の掘立柱建物群や上津遺跡の溝・掘立柱建物などは存続するものの、多くは8世紀第3四半期に廃絶するようである。恭仁宮期には、「街区」が一時的に拡大するものの、京城でなくなると、たちまち元の状態、おそらく水田等の耕作地や荒地になったと考えられる。

小 結 恭仁京の造営過程ならびに廃絶の状況を発掘成果を中心に示すと以上のような4段階に整理できる。ただ、第2段階と第3段階の実態的な時間差は見出しにくく、相対的なものでしかない。溝や掘立柱建物は「街区」の形成に対応しているため第3段階に位置づけられるが、これらに先行する造営工事の段階を第2段階と捉えているに過ぎない。そして、すでに指摘したように、第2段階と言える確実な遺構は、上狛北遺跡の土坑S X96のみである。この土坑S X96の出土遺物をみると、まだ断定的に言えないが、恭仁京の造営は、天平12年12月の遷都よりも早く着手されていた可能性が高い。^(注22)

(3)京城について

これまでの研究において、足利や伊野、岩井らが提示した復原案は「矩形プラン」を前提としたものであった。一方、山田が新たに提示した復原案は、地形の制約を受けた京城を想定するという「不整形プラン」であった。この点において従来との諸説とは異なる斬新性がある。

両者の違いは、おそらく恭仁京の造営が計画された当時において、どのような京城のプ

ランが準備されていたのか、という議論であろう。しかし、現時点における研究成果を総合すると、恭仁京の造営とは、恭仁京以前に形成された「街区」をもとに、それを拡大した「街区」の形成に過ぎない。それがどの程度の規模で実施されたのか、それを明らかにするための材料は、なお不足している状態である。この点は恭仁京の「条坊施工」の問題とも絡んで、今後の研究課題である。

しかし、これまでの研究の蓄積から、何らかの京域に関する提案を行うのも無意味なことではあるまい。以下、筆者の京域に関する、現時点での考えを述べたい。筆者としては、山田の考え方を原則支持し、京域は地形的に制約された「不整形プラン」であったと考えたい。具体的に示すと、以下の通りである(第5図)。

恭仁京の左京域については、山田が提示したような木津川を挟んだ南北の盆地部分に想定して良いだろう。その場合、無理に鹿背山の山塊を含む必要はないと考える。一方、右京域は、本稿でも触れたように近年、発掘調査成果が増加しており、具体的な様相が明らかになりつつある。しかし、いわゆる「京極」を示す痕跡は確認されていない。また、左京域と異なり、木津川市西部は地形的に開放されており、具体的な「京極」を想定しにくい。京域が地形的に制約を受ける範囲との前提を踏まえると、右京域の北限については、東側



第5図 恭仁京復原案

の山塊が木津川に最も近づく場所と考えべきであろう。それはかつて足利が想定した鳴子川付近となる。この場合、京域の西限は木津川と考えられる。これに対して、右京域の南西部については、その範囲を具体的に示すような地形的な特徴がみられない。これまでの発掘調査成果によると、木津地区の東部は京域に含まれるが、西部は含まれない可能性が高い。今後、この地域での「京極」に関する遺構の検出に期待したい。

以上、恭仁京の造営過程と京域の範囲について、筆者の思うところをまとめてみた。どちらも「解明された」というにはまだまだ不確かなことが多くある。今後も調査・研究を進め、恭仁京の実態を明らかにする作業が発展することを期待したい。

(つつい・たかふみ＝当調査研究センター調査課課長補佐兼企画調整係長)

- 注1 山田邦和2019「恭仁京復元への試案」京都学研究会編『京都を学ぶ【南山城編】』ナカニシヤ出版
- 注2 足利健亮1985「恭仁京プランの復元」『日本古代地理研究』大明堂
- 注3 足利が鹿背山(大野山)とした山塊は、小さな谷状地形が入り組んでおり、山塊の西寄りに南北方向の小規模な谷筋(=「釜ヶ谷」)がこの山塊を大きく東西に分けている。西側の山塊に「城山」という名称があり、両者を区別する場合は「城山」と呼ぶことがある。これは、南北方向の小規模な谷筋、「釜ヶ谷」を恭仁京復元の作業で重視する提示されているため区別する必要があるからである。
- 注4 平良泰久・奥村清一郎ほか1980「上津遺跡第2次発掘調査概報」『木津町埋蔵文化財調査報告書』第3集 木津町教育委員会
- 注5 千田稔1991「恭仁京プランの問題点」『木津町史 本文篇』木津町
- 注6 伊野近富1991「恭仁宮と恭仁京の復元」『京都考古』第63号 京都考古刊行会、伊野近富1992「恭仁宮・恭仁京復元案の副案」『京都考古』第65号 京都考古刊行会
- 注7 岩井照芳2012「恭仁京の復元」『古代文化』第64巻第1号(財)古代学協會
- 注8 筒井崇史・松尾史子ほか2012「上粕北遺跡第2次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第150冊(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注9 福山博章ほか2020「岡田国遺跡第3～5次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第180冊(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注10 筒井崇史ほか2005「片山遺跡第2・3次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第116冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注11 前掲注3
- 注12 伊野近富・筒井崇史・松尾史子ほか2010「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成20年度発掘調査」『京都府遺跡調査報告集』第138集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注13 中島正ほか2000「上粕東遺跡」『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第24集 山城町教育委員会
- 注14 有井広幸1996「釜ヶ谷遺跡第3次」『京都府遺跡調査概報』第73冊(財)京都府埋蔵文化財調査

研究センター

- 注15 中谷雅治1987「甕原離宮の位置について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注16 前掲注2
- 注17 『続日本紀』天平17(745)年5月6日条、『行基年譜 天平十三年記』など
- 注18 『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』に次の記事がある。
「(前略)一泉木屋并園地二町 東大路 西薬師寺木屋 南自并一段許退於北大河之限(後略)」
- 注19 足利健亮1985「山背の計画古道」『日本古代地理研究』大明堂、および注2文献
- 注20 神野恵2021「平城京近郊窯の須恵器生産」『奈文研論叢』第2号(独)国立文化財機構奈良文化財研究所
- 注21 『万葉集卷一』「藤原宮の役民の作りし歌」(歌番号50)では、藤原宮造営に伴う木材を近江国から木津川(泉川)を経由して運んでいることから、遅くとも藤原宮造営時には「泉津」は機能していたと考えられる。
- 注22 栄原永遠男は、その著作の中で恭仁宮やその遷都直前の頓宮などで検出されている大型掘立柱建物の建設に数か月を要することから、恭仁宮も含めて遷都の天平12年12月よりも数か月前から準備していた可能性を指摘されている。上狛北遺跡で検出された土坑S X96の調査成果は、考古学的にそれを裏付けているといえよう。(栄原永遠男2014『聖武天皇と紫香楽宮』敬文社)